

なり、市ノ瀬に至り西に折れ、古屋谷で清水川を右岸に、鳴瀬で切山川を右岸に、下浦波で湧波川を左岸に受け、森下・才田を経て河北潟に注ぐ。流程三〇軒。

モリモトマチ 森下町 金澤の町名。或は森本町とも書いた。龜尾記に、森下町の町名は、河北郡森下村の龜田大隈の末裔が染工となり、龜甲屋と稱してこゝに業を開いたに起ると記する。

モリモトヤコライ 森下屋古來 通稱甚兵衛。富川氏。能美郡安宅に生まれ、金澤の町役人となつた。俳諧を眉山・蒼虬に學び、初號を孤風庵固來といひ、後松裏庵及び幾囃庵を繼席した。文久二年七十七歳の時後猿丸集を著し、明治以前に歿した。

モリヤマクマノシヤ 森山熊野社 羽咋郡徳田に鎮座する。二所宮熊野社の別當安養寺がこの地に轉じてから勸請したものである。安養寺記に『熊野權現其初不知、永祿十年徳田佐渡守再興、社領寄附。』とある。又式内等舊社記には『森山熊野神社。得田庄得田村鎮座。庄内惣社。故得田等六箇村修造其社殿也。』と見えて、その六ヶ村は徳田・館開・佛木・代田・印内・矢田である。明治四十二年社號を徳田神社と改めた。

モリヤマジヨウ 守山城 越中射水郡に在る。一に森山に作り、又海老坂城とも二上城とも言うた。六渡寺川に臨む山城で、峰高き道嶮に、その附近に家士の邸跡がある。初め建徳中、足利氏の將斯波義將の據る所。天正九年以降佐々成政の將神保安藝守氏張が之を守つた。十三年八月豊臣秀吉、成政を富山城に討つて是を降し、氏張は守山を去つたか

ら、前田利家その將岡島備中一吉を置いて守備に任せしめた。尋いで九月秀吉前田利長に彌波・射水・婦貞三郡を賜ふに及び、利長は前領加賀松任を去つて守山を本據とし、十八年關東に出陣した際には、前田對馬長種を留めて城代とした。慶長二年十月利長守山を去つて富山城に移つたが、これは守山の地勢高燥、風威常に猛烈なため、居るに堪へなかつたに

よるといふ。利長の守山に在ること前後十三年に亘り、この時再び前田長種を留めて之を守らせた。三年利家の上野草津より歸途、越中今石動を過ぎた時、その子利常が長種に率ゐられて之に謁したといふのは、當時利常の守山に養はれたからである。しかも五年の役に利長の出兵した時、長種は富山城の留守を命ぜられたが、守山に置かれた裨將の名を見ぬから、この頃既に廢城となつたものといはれる。

モリヤマフチノウヘケンカノマキ 森山淵上喧嘩の巻 一冊。文祿元年越中守山なる岩々淵の喧嘩に於ける萩原八兵衛の覺書を、天和三年藩侯の命によつて、その子孫から提出したものである。

モリヨシ 森吉 珠洲郡大谷の内の小字。
モリヲカハセイ 森岡波井 鳳至郡黒島の併人。秩卜の子。通稱又四郎。文政五年十月十日歿、享年七十一。
モリヲカフボク 森岡冨ト 鳳至郡黒島の併人。名は又四郎。別に獅子窟又は三木ともいひ、園更の門人であつた。寛政十年十二月十七日齡七十で歿。その著に力すまふ、ひぐらしぶえがある。子波井、三周忌に當つて追悼句集を編し、雪のあけぼのと題した。

ら、前田利家その將岡島備中一吉を置いて守備に任せしめた。尋いで九月秀吉前田利長に彌波・射水・婦貞三郡を賜ふに及び、利長は前領加賀松任を去つて守山を本據とし、十八年關東に出陣した際には、前田對馬長種を留めて城代とした。慶長二年十月利長守山を去つて富山城に移つたが、これは守山の地勢高燥、風威常に猛烈なため、居るに堪へなかつたに

モロエ 諸江 石川郡鞍月庄に屬する部落。三宮古記文和二年四月十日臨時祭の條に、『練童巴下十一人云々、諸江三人』と見え、龜尾記には、諸江村三ヶ村に分かれ、屋敷跡及び巨利の跡があると記する。

モロエダイコン 諸江大根 石川郡諸江の秋大根を名産とし、他所のものよりも風味が良いと、延寶六年の書上にある。
モロカガ 諸加賀 ↓カガギヌ 加賀絹。
モロダスケヨシ 師田祐吉 號は助齋又は白華樵人。文政頃の人。寺子屋の師匠であつたといふが、その傳の詳を得ぬ。椿原天満宮記・小丸山神明宮記といふ如き文を認めて、

著名の神社に殆ど納めてない所はない。
モロハシ 諸橋 鳳至郡に在つた舊邑名。文應二年の諸橋六郷田數目録に、『本郷ニ付諸橋・阿曾良・鹿並上三郷』と見えて、この本郷であつた諸橋村の名は後世存せぬ。しかし天文元年の諸橋六郷衆のうち諸橋次郎兵衛尉があつて、その次郎兵衛家は後世に至るまで前波に存し、又六郷稻荷神社も同部落に鎮座する點から考へて、本郷は即ち前波附近であり、今俗に沖波・宇加川と共に諸橋といふが如く、この三部落が諸橋と呼ばれる大村であつたのである。更に明千寺もその内であつたことは、天文元年の諸橋六郷棟注文に『百七十六間諸橋本郷、此内廿九間明千寺』とあるによつて知られる。次郎兵衛の家に傳へる慶安三年十一月三日前田利常の印書にも諸橋村之内を以云々と載せるから、その頃尙この邑名が稱へられてゐたのである。

モロハシイナリジンジャ 諸橋稻荷神社 鳳至郡前波に在る。式内等舊社記に、『諸橋郷前波村鎮座。稱六郷稻荷明神。爲諸橋六郷之惣社也。』と見え、能登名跡志には、『氏神稻荷宮、此の邊の神社にて、神目伊豆伎彦神社神社六郷の大神稻荷大明神と書ける額あり。此の社は毎歲祭祀に猿樂あり。則金澤の諸橋權進は、先祖此村に在て、類家等今にあり。その頃舞臺のありし所を道化山といふ。又權之進屋敷といふもあり。其神樂の時諸入用等留帳此社にあり。其外寶物あり。天の平瓮・手抉とて神代の器物也。春日作の實瓶といふものあり。同作の翁の面・靜の面・朝比奈の面とてあり。』とある。

モロハシウヂ 諸橋氏 富樫氏時代からの最も古い能大夫であり、その祖甚吉に就いては系圖に、『諸橋甚吉。元祖以來相馬氏にて罷在、家の定紋者、則繫馬に而御座候。代々能登國諸橋村に居住罷在、能之流儀は金春流執行任罷在候。其頃能州珠洲郡正院村八幡宮に、能登國太平之神事能有之、前々より甚吉義頭取相勤仕來候。其外所々祭禮能相勤申候。然處何れの代に候哉、富樫左衛門殿へ被召抱、扶持給り候。甚吉暨能大夫四人有之、以上五人の列頭に被申付候。且又富樫殿御家七曜の定紋を給り、于今右七曜替紋に付罷在候。其刻日光作之翁面を給り、右面箱に茂、七曜之御定紋付有之、今以相傳仕候。右富樫殿方に被召仕罷在候段、寛永年中之頃まで、名前由緒等中絶仕、相知不申候。富樫家滅亡の後、珠洲郡正院村八幡宮之能有之、後之諸橋甚吉相勤申候由傳承仕候。』と傳へてゐる。諸橋氏は前記の如く初世以來金春流であつたが、喜太夫(初名市十郎)が喜多七太夫の門から出て、先代甚吉に養はれ、貞享三年閏三月

前波村鎮座。稱六郷稻荷明神。爲諸橋六郷之惣社也。』と見え、能登名跡志には、『氏神稻荷宮、此の邊の神社にて、神目伊豆伎彦神社神社六郷の大神稻荷大明神と書ける額あり。此の社は毎歲祭祀に猿樂あり。則金澤の諸橋權進は、先祖此村に在て、類家等今にあり。その頃舞臺のありし所を道化山といふ。又權之進屋敷といふもあり。其神樂の時諸入用等留帳此社にあり。其外寶物あり。天の平瓮・手抉とて神代の器物也。春日作の實瓶といふものあり。同作の翁の面・靜の面・朝比奈の面とてあり。』とある。

モロハシウヂ 諸橋氏 富樫氏時代からの最も古い能大夫であり、その祖甚吉に就いては系圖に、『諸橋甚吉。元祖以來相馬氏にて罷在、家の定紋者、則繫馬に而御座候。代々能登國諸橋村に居住罷在、能之流儀は金春流執行任罷在候。其頃能州珠洲郡正院村八幡宮に、能登國太平之神事能有之、前々より甚吉義頭取相勤仕來候。其外所々祭禮能相勤申候。然處何れの代に候哉、富樫左衛門殿へ被召抱、扶持給り候。甚吉暨能大夫四人有之、以上五人の列頭に被申付候。且又富樫殿御家七曜の定紋を給り、于今右七曜替紋に付罷在候。其刻日光作之翁面を給り、右面箱に茂、七曜之御定紋付有之、今以相傳仕候。右富樫殿方に被召仕罷在候段、寛永年中之頃まで、名前由緒等中絶仕、相知不申候。富樫家滅亡の後、珠洲郡正院村八幡宮之能有之、後之諸橋甚吉相勤申候由傳承仕候。』と傳へてゐる。諸橋氏は前記の如く初世以來金春流であつたが、喜太夫(初名市十郎)が喜多七太夫の門から出て、先代甚吉に養はれ、貞享三年閏三月

前波村鎮座。稱六郷稻荷明神。爲諸橋六郷之惣社也。』と見え、能登名跡志には、『氏神稻荷宮、此の邊の神社にて、神目伊豆伎彦神社神社六郷の大神稻荷大明神と書ける額あり。此の社は毎歲祭祀に猿樂あり。則金澤の諸橋權進は、先祖此村に在て、類家等今にあり。その頃舞臺のありし所を道化山といふ。又權之進屋敷といふもあり。其神樂の時諸入用等留帳此社にあり。其外寶物あり。天の平瓮・手抉とて神代の器物也。春日作の實瓶といふものあり。同作の翁の面・靜の面・朝比奈の面とてあり。』とある。

モロハシウヂ 諸橋氏 富樫氏時代からの最も古い能大夫であり、その祖甚吉に就いては系圖に、『諸橋甚吉。元祖以來相馬氏にて罷在、家の定紋者、則繫馬に而御座候。代々能登國諸橋村に居住罷在、能之流儀は金春流執行任罷在候。其頃能州珠洲郡正院村八幡宮に、能登國太平之神事能有之、前々より甚吉義頭取相勤仕來候。其外所々祭禮能相勤申候。然處何れの代に候哉、富樫左衛門殿へ被召抱、扶持給り候。甚吉暨能大夫四人有之、以上五人の列頭に被申付候。且又富樫殿御家七曜の定紋を給り、于今右七曜替紋に付罷在候。其刻日光作之翁面を給り、右面箱に茂、七曜之御定紋付有之、今以相傳仕候。右富樫殿方に被召仕罷在候段、寛永年中之頃まで、名前由緒等中絶仕、相知不申候。富樫家滅亡の後、珠洲郡正院村八幡宮之能有之、後之諸橋甚吉相勤申候由傳承仕候。』と傳へてゐる。諸橋氏は前記の如く初世以來金春流であつたが、喜太夫(初名市十郎)が喜多七太夫の門から出て、先代甚吉に養はれ、貞享三年閏三月

前波村鎮座。稱六郷稻荷明神。爲諸橋六郷之惣社也。』と見え、能登名跡志には、『氏神稻荷宮、此の邊の神社にて、神目伊豆伎彦神社神社六郷の大神稻荷大明神と書ける額あり。此の社は毎歲祭祀に猿樂あり。則金澤の諸橋權進は、先祖此村に在て、類家等今にあり。その頃舞臺のありし所を道化山といふ。又權之進屋敷といふもあり。其神樂の時諸入用等留帳此社にあり。其外寶物あり。天の平瓮・手抉とて神代の器物也。春日作の實瓶といふものあり。同作の翁の面・靜の面・朝比奈の面とてあり。』とある。